

中村俊定文庫
文庫 18
537
2





雪農詩集卷之二

藥城山下連



阿是此後よも向ん雪山散る
 雪と散る雪もなむく碑の面
 散る雪は木のなるとあん塚のあ
 種よおて新く白妙乃雪か
 うるよ知る雪もも向ん雪か
 雪をよと知る雪もも向ん雪か
 及初ら—雪に雪かみくも

秋 是使

分七翁

梅初

杜雪

英戸

草洛

湖小

眠高

四季混雜

引致れ答表れや明乃麻

反古尺小川竹高れ友や出用干

之もれややリハ橋の四ッ時分

早蕨より笠かゝむげろ山路引

子にきよ破れもぬや柏黄ひ

乳舌子をさくく一掃たり小原石

夕迄や海やまふハ掃跡一

山吹や岩流く下ハ水れ音

お乃山此道おほくり初さく

引枯や葉火きく家た台音

山の端の月尺送るやほと女尺

角漢よ小れ女の音く小夜時向

衣花野や月冬幽ま旁此海

をまか隣の人そおろ月

朝香や山ハ隠れて堂一ツ

涼しきや月た記川を竹戻

山吹や垣下一換子の遠か

梅詞

梅川

柳奇

芙蓉

舊曉

有城

尺是使

眠花

沢水

杜雪

日くに歸柳 初きて葉まぐり

柳南

猫乃子し獅子れきをひや牡丹畑

少年 柳童

又渡せけ瀬れきも何り芳代海

嶺黛

初くも来てをを打ん初梅

真 語夕

床鳴や家ふとの残思いせ

湖小

忍ろしや茨り掛ふ蛇乃衣

や梅宿まかすく碎こり

たよくと仲多きまきり春の音

麦丘

洪言やきれお破り障子より

七才 虎山

元山や来るとおある冬は月

栲青

体ふとねりあてい初を野か

草海

涼しさを履上り月ハ号し初

妻あり香や冬の履登る下袴の音

○

提て来るくらに咲たり杜若

上田 雨石

よ珠心河の海一音を打りし

旅をよひを忘る富士の日あは

雲帯

都を侍んよかけぬいとも

予との世をよのきこひ世の流きこふ世

とよて誰か終りん

とよ終りや月子曲川に飛弾の雪 上田 左十

山僧の麻ふくれりり終れ飯

夏の月旅路雲をとほしむまふ 如毛

来一友の眉よかつ利ぬぐぬの言

新ハ山の志きらやうなる終 月 本布

谷のりのやさも又へうう麻れ終

新苔春や花れらうう客乃波法 新所 哥久

七の月や芥ハもる露の巻物 スハ 指曉

冬川や若橋川とよ夕暮る 田沢尺 茶ト

吹のりも白ひ配るや麻れ梅 高江 壯養

春つとよ道のあふや花 越前 嵐夕

飛鳥と流風と埒阿とゆかり 田沢 止在

涅槃舎やの舞もそ日ハ笑ひ 上田 麦秀

蒲朽と蜜ハ律代の光り 上田 麦秀

摘中子野ハ讓りてや物 上田 麦秀

君所 上田 麦秀

直つた歩履や靴の風神
あつた人のなきはつた月夜

○

身振ひは砂粒のこぼれ敷か
又一雪ハ今そ秋家なる川時雨
羽立は雨くき梅乃高赤あ
木の下の茎ハ細一葉のま
山信や着る葉の音の子取終
志も一葉を風ハ尺へりうあ未立

岩野 尺 秋水

岩野 猿左

吉田 尺 雨柳

岩野 同賀

南條 尺 可三

七夕や御あは子と書む紙乃舟

飯山

白糸

橋杭は草のまきくちる長川

桑田 有栲

おとむらひの吹や野面は梅のま

又る根や鼓くねも何り茶釜坊

那堤乃陰申りまきて 朧月

よく尺ハハ眠るてもたハ細代を

岩るるや海に花を流し月

屋敷や打まのきそ一夏のあ

散むれ花よとくちる小萩うか

素原

文甫

鳥塚

風は降るよあまえておぼしき

素直

妻風はむれと道きひりり

一竹

たしなむにむいふこのまほし

送り火のかんふ跡に野寺に

田鶴群を町ふれ古江音渡

柳東の秋は河や水 書の本

文眼

白芥子や秋風を立ちるにり庭

るのふれにうふあまをむ時分

二ツエツと落けて清る河さき水

朝白乃河海りよ近て表水あり

女 義菊

草木柳あまに人や秋のくれ

女 蘭夕

里まき 嵐れを海や村尾花

文 捕

危危飛んで浪は波き河尻に水

四ツ尾 蝦雲

郭 ちけてうきわ夜をかき

スハ 自往

え川 秋やまきさめうる石の乳

志くは晴るかくは見えはる柑が

梅咲てやいとおは海の高江川

うきまにそくれまき名なりせ日柳

佐郡 玉芝

不の細くそぎ紫の鼠吹てけり 米施 長江
色はあめ秋のふも色は暁松枝
ふも色は花乃色は折りかぶら
ふも色は （一） 百舌
ふも色は （二） 久留

春之部 上野

草花はむは河あさりそや鱒の考 下道寺 河舟
日之流中や磯飛初るむ 長江 松壺
雨晴や （三） 赤棧 倚流

大嶽や高の岩根は不葦 女 落井
竹床や小童御あさり 女 花彌
蕨採や日よ赤く水一松う坂 女 紫英
まじりたの海や地をけをうみ 知東
大株や折阿さる一葉は 蓮沼 鼠黛
道地色とや陽炎をさる古 イセサキ 紙帖
目よたぬ牛の行末や燈野原 南牧 一杓
咲深て草花あさり 女 其水
さあ 砥沢 蓼水

去凡や鷗鳴江のさしれなき 下信 奥洲

浪濱や磯の清て夕のそよ 宮崎 翔宇

みく乃時又を穿しおろる 一宮 吟曉

茶のむやむいし白に花の終、 秋蘭

海を飛んでをくる海柳 大久保 把菊

入山や煙之流ふ夕瓦久良 小畑子 三巴

衣を越はまよりあしや男花子、 きよ女

白くくと曲糸し梅や畑の角、 楚岸

子蕨の燈砂起片野末 禁 而朴

花盛後結ふ寺乃男の那 高平 羅光

世山に津芥音そよ 素蘭

けられ曇晴たりむ乃雪、 南来

ををすしハ庭し 沼田奈良 雲子

散しり日曇り梅なり 五涼

るを 上植木 竹葉

はくし 山鳥

み物 細石

鶴 廣水

初蕨木ぬる極乃殺ハナ上桂木 我石(義)

白桃の華散り流玉さひ江家堤 柳眠

若草や堤のれれ日のおもて、 専車

赤砂子地や磯野の土も莖長し、 拂石

雨ふれや胡蝶行かゞ日北移り、 文聴

砂系や柳一本に花ほけけ大原 青浦

見渡せぬ柳や柳や帆かゞふ、 弥南

行来の朝子テケリ場さくらな、 白斗

新橋や文四五寸乃梅 白大同 文江

山吹やいそ水河りけか屋敷江を柳 友之(路)

着了池の小崎乃莖可那松羅

春まやあゝくろりの萩 縣尺 我白

去来や揚うれ音隣差 米宜

夏あゝ子小持さゝくろり大同 凡中 女大 头朝

梁子之戻れさる女 戸さるを親燕、 奥子

赤土乃くろ新原イセキ 拂席も辰廿里ハ 蹄香

摘中や乳母、持吉井 了小籠其 石

和り凡は本の芽と一日くト 全

夏之部

新戸出や雨の田原吉井鳴如鶴 其蝶

而乃日やか白尺鳴如鶴白 柏葉

梔子の垣もむくや比丘尼寺、 枝邦

すくすくや細束休心柳下田陰 奥洞

ふ集てん同起てん同一尺釣

外の山尺いももん尺富士詣て、 何籠

分新青いさよの中尺のあき外 我義白

麦秋や尺原毎尺意尺記尺白尺此尺音

左川や男歩尺之尺乃尺女尺乃尺 立尺聖尺花尺怖尺妻尺杏尺

乳尺多尺子尺れ尺安尺く尺情尺あ尺や尺郭尺公尺、 さん尺女尺

庭尺こ尺免尺し尺富士尺乃尺杜尺麻尺や尺な尺あ尺ま尺、 くの尺女尺

雨晴尺や尺芦尺色尺い尺し尺よ尺む尺行尺く尺子尺、 貞尺そ尺音尺

蜘蛛尺福尺や尺人尺れ尺い尺よ尺ぬ尺く尺を尺水尺橋尺、 蛙尺水尺

川尺岸尺れ尺さ尺く尺た尺尺尺虫尺や尺物尺れ尺が尺り尺、 松尺羅尺

涼尺の尺む尺や尺嘆尺し尺斤尺色尺の尺捨尺小尺舟尺、 米尺角尺

折尺も尺よ尺し尺父尺の尺麻尺是尺し尺蜀尺魂尺、 香尺籠尺

ち尺さ尺紗尺る尺苺尺子尺し尺雨尺の尺川尺夕尺小尺 大尺向尺、 吳尺山尺

莓白小澤のほろりや深古多大目 以啼
 麦秋や一孫と抱きし一かせき大目 雪戸
 入梅晴やふる居るとあり 納鶴は 利川
 河とさかたの心あはさるに等しん屋 百童
 若竹や畑乃ちりか原夕日新うす 眠江
 川智やうまふ鳥のさかさめり、 素蘭
 古へ乃 境は海やかき川とく、 花多
 川の雪は詠ふ山そ五月 雨たひり 麦雨
 石橋のむすふ荒々り 牡うす 燕飛

深山色や反枯枝の猿おのせ大目 有来
 夕之や埃迹ち伝ふ此御志社 宇雪
 涼ししやや岸はさめく浪の音 麦兔
 涼ししやや 二旭
 道程色や反の本流の苔ひ糸や界 示鏡
 夏は月管台より船よりり柳柳 柳眠
 古沢や岩滑るく小苔は忌、 谷石
 行圃や羽蟻の山立而の後、 古車
 管ふ羽文川 崎く人れを我呂 佳物

五月雨や緋色に庭の牡丹の文イセナキ 芦明
 何處なる初ハ秋川や草 飛枯木 山名
 布き江川の淀や一ツれ岸、 如竹
 枯色や磯山如乃麦の 姓ハハ 南榎
 卯此處のそりや夜風の月落き大 女大 湊大 船
 桂てのそり江陸乃田唄の那後 風牛
 五月雨や糸のたるく 流さうな長 侘流
 時を飛鳴よかく一羽の那 孟川
 おとよ海くよ夏の乾川の空行渡、 舟媒

秋之部

鳴る麻をえよか麻此次の那南 一牛
 ナ六夜よおよもかとかたそり 酒、 女古 有
 秋を川新せよ替り水一案出介御 蓼水
 人里ハそりかきうして 志野宮 柳台
 清る草れまに花しり暮 此秋、 朔宇
 萩の花を落を振あて 岳な柳うぬ二 丹胡
 鶯の歌のり多ふもきくさる小庭外、 羽黄
 下り獨新しよを折たより折、 芳夕

ちと破て只柄打井の多清三井 其蝶
 白櫻の美おまきく免りう明の月、ト全
 名月やぬもなほく日におもて、女園李
 而る水や鵲鳴く野路乃一里塚、為梁
 交る程陸ハ圃へて肌をく、石
 其又似く日 和定てふ果人ハ 彦忠 早宣
 あつ悟や礼る、萩を斗の策木 七娘 紫英
 三月の木の石に薙く三の此有、祖秀
 孫風や百会の實育川四月越、孟川

名溢流 荻お中一や藜の意 河亦

言砂の浦より丸糸は後傳お仲とや
 名し知ぬ鳴く舟よりしと

心細く一葉又伝虫乃秋た鳴く 子木園
 福妻や入はく、小莫く、見お 今
 相一葉をてきり、雀 三之塚 五明
 而る落を帯く、白おや、蕎麦の玉 彦忠 健明
 秋の京月し萩より、おん、那 蓮伝 五雲
 家候より伸て行なう雁城干 イセサキ 花凹
 夕照や田中の表く後りたる 青蒲

秋のや野中此家の露氷壁
 さぬく此草の氷れや蜂の面
 斥くふら啼子を抱て砧可南
 栗拾ふ山綫り子乃峠り向
 後取てて羽織かり若後月
 夜中開て月此小舟の浮き人
 月影中庭より何まで秋乃香
 麻啼や星ハ川も此夕 廻り、
 一面より外より秋花乃盛るゝ、
 二旭

細石

竹葉

廣水

薄石

芦渚

蘭舍

銅水

麦危

二旭

一日此野分乃夜や塔の陰
 朝影此又入る時ハ羽々り
 夜やまきく御燈の虫の鳴き形
 席坐してこの移るる月夜
 一をさるりのうねる天の川
 鳴子引 危れ力乃 履々利
 月白く小田の雁鳴く 巻紙外
 黍のうら風荒く 後此月
 山本やま方の中 行水の音、
 眠江

七星

燕飛

花南

麦雨

有来

雨朴

三巴

羅光

眠江

白の月照るや 琴の火乃 落キネ 素孝

ふんのうと 溜シ 如シ 節シ 苗シ 之シ 夕シ 五凉

床鳴シ 巾シ 落シ りシ 之シ 入シ 日シ 赤シ 利川

妙シ 妙シ 二シ 晴シ 鈴シ 乃シ とシ 暮シ 雨シ のシ 音シ 大系 弥角

似シ つシ うシ やシ 苗シ 杉シ 系シ 此シ 女シ 席シ 花シ 雪戸

多シ 多シ のシ 濡シ 羽シ 一シ 月シ のシ 光シ 外シ 尺シ 梵シ 多シ

刈シ 冬シ 尾シ 水シ 田シ 二シ 月シ 乃シ 詠シ 妙シ 丁古

武シ 花シ 野シ やシ 小シ 枝シ 子シ 落シ 此シ 絶シ 馬シ 家シ 荻系 指言

稻シ 書シ やシ 鷗シ なシ くシ 雨シ 白シ 一 文刻

穏シ 々シ にシ 降シ りシ 其シ 下シ のシ 雪シ 此シ つシ もシ りシ 々シ 雅富

山シ 麓シ 賣シ やシ 己シ 初シ 一シ 此シ 新シ 意シ 思シ いてシ 竹 一

かくシ 枯シ 一シ 細シ 二シ 糸シ 三シ 糸シ 四シ 糸シ 五シ 糸シ 六シ 糸シ 七シ 糸シ 八シ 糸シ 九シ 糸シ 白斗

とんシ 之シ りシ とシ 曇シ るシ 於シ やシ 納シ 豆シ 汁シ 林几多

翁シ 初シ 々シ りシ 粥シ 喰シ てシ 長シ 分シ 室シ 子シ 外 宇雷

風シ 一シ 去シ 帆シ 一シ 舟シ のシ 行シ 流シ 一シ 文聽

三シ 尺シ 此シ 杉シ 一シ 枯シ 野シ のシ 阿シ 一シ 外 柳石

一シ 竹シ 而シ 晴シ 一シ 詠シ やシ 月シ のシ 暈シ 示鏡

吹シ 水シ 一シ 又シ ちシ 三シ 宵シ 乃シ 落シ 系シ 外 谷石

荒風中蓮乃莖此おしイセナキきぬ 芦堂
 山石ハ落葉のよよ落葉ウチふらふ、
 風中あらさお埋む居れおの 如竹
 冬此面みおれも白く晴まらり 南樓
 岸雪の路中おりや嵐色 栗庵
 麦葎や時雨よ志別心晴く煙 松臺
 落積——木の葉よ暮のに就くハ 女 落竹
 丸免きり雪よ鶉鳴く朝霧ハ 女 舟螺
 足送らん海系るる空れぬの 女 花彌

露の露や進くからある虫の終大向 文江
 了らぬ花野の中乃小松系、 雅富
 一ツおはなれも淋——秋の音、 冬十
 寺河や砧乃中よ心心の音 吹鳴
 空底よ横火のえて床の終、 為一
 垣とせん世思ふ木一色他りり、 吳山
 靈柩や月さ——風の事浅原ふところ 尺 風州

冬之部

道妻くく乃采女くふ路中言崎小
 神笠よ初ふのと先んくかの雪狂井田 雅釜
 軟虹くくを山時雨なありり 五凉
 吹閉くく一の管をくく物外 素考
 了くくくや暮のあるる帰意 雲子
 くくくや誰踏そめく一の海 百童
 錦追ふて海系るふ漢まうそ 林也岸
 死考考の羽をのけくくく落葉小奇 青牛
 星近く狐鳴くぬれさくく、 其十

六十人色海世やくくくく吟 嵐黛
 主をよま妻保と記月の初り外 為梁
 日の磯や賦かたる保 松葉
 芦かして岸ハ砂おく夕外 園李
 童歌乃くくくはねあり 吟曉
 舟洒くくく心旅のくくく外 羽黄
 鶴一羽奇外 席よま外 枯野外 芳夕
 松凡よ只者明れ月家外 馬川
 月偏て子を鳴くく存を外 五心領

大同、
 一七廿年

四季の鳥の事

世に多や巢破る鳥たぐい雀

大同

鈍化

夏川や空を黒めきる友かき鳥

秋の空を赤あはれゆく海鳥か

野鳥は風を争ふや冬は空

同野鳥

かけろあ乃中を智あや牧の羽

梧鳥

片里や清水くまのこまを

及野鳥や鳥の面吹初河

降音より人里をよむ野鳥

かせ風て花の中を流す柳か

女松尾

ふや降るん風たれ音の勝あ

目谷

ふと文を鳴や尾上のこるれ松

岫をあふ雲ふ雉子啼く物れ

百丈

多川 鳥は野鳥秋のこるれ

雪春集卷之三

四季混雜

下野

而と仰る原の雪や昔の雪日光 昔玉

夕歎乃花花や問ふくく花

補陀洛の誓や遊の百日死 尺璞之

乳をひや蘇のを流めは

夕歎乃尺尺乃やとらん 尺宝水

初序や越来る年一は三日の月

梅咲や此原をに尺尺ちあり 松路

行々水々尺多い日も何き山極、 麦風

因や夕飯をゆりみりれく、 掬尾

牛を追ふ山路の雪や昔麦のを、 芥久

冬結を何と移りて鳴かくに

寝るはくく一のさそり尺尺尾 尾江

日雲日の静乃粒よむ木槿外

破氷る障子さをも何れ雪の風今市 珠明

虫如音や草の元まゝ石れ上鳥山 素由

雪乃ゆる山を布るの笑ひ危、 駒井

四季混雜

甲斐

峯の絶き流音より

夏田

可都里

山極斧さく流水澄み

黒沢

馬曉

ちろくと春の柳乃光々南

三沢

京戈

宇久の舟の舟子訓讀て初音

市川

岷江

山吹や浅沼水より色深し

市川

芦龍

石埃立て雉子鳴く砥山外

奇永

柳枝よりけて柳花 氣色

かけろふや今を感の碇並流

鳴峰

馬雪

いはくを水を鴨乃

湖月

阿の浮林は詣侍り

阿のなしハアを柳の花

八百所

二彌

村端や如阿の

市川

芦角

夕立や雨の凄く土白

夏田

路狭

くおと又軟く

馬雪

幾きひる夜の柳 亂る

甲府

奥坂

伊豆の花なる

馬

波

這ふて居る虫ハ拾つて

馬曉

山星や木樵るおのこし田植唄
 新流や風定ぬ並山くろ路
 新流や羽立日ハ又とよの花の秋
 嵐吹砂路く披吹去露外
 の然と修一の行旅や九月尽
 たふひあやきありおて雪れふ
 戸残きてこの橋家屋夕時雨
 かくなすは新居唄一冬此日
 文お氣立之唄の朝日にききり羽
 芦角 漢南 路侠 可初里 漢南 由古 孤山 岷江 關也

一日はたうれもやうに冬は川
 冬波

春之部 武藏

本安れお態鶴来く南のき一
 橋ちふきおふいゑて長深なる隣
 津津流のきり志きうに勝月、桃斗
 あゝ咲ぬ茶静一あり而の音 然谷 風乙
 長深さや谷さくは杜り唄、琴島
 花さくく散るや野寺れ古簾、何幸

十頭免くや蛤系屋此喜たそみ 熊谷 鴨一
 山寺に猿引 泊休善さりり、 古川
 而晴や女まゝ 不喜此市、 為水
 乞食の系文淋 夕きくく、 獨何
 今朝越 山もたろ 小崎 榎河
 心くくと皆や比り付春此月 金久保 白雨
 而此月晴て梅の散る夜外、 小来
 道是くは條の杖賣る二月外 本居 三山女
 梅乞て 眠 ぬ月の梅外、 李崎

其而や小止とや以雲落し、 羅佛

夏之部

耳とまは田取と山をくくる引 本居 羅佛
 此流や婦中川は流り 片谷 素山
 蚊喰多鳴や縣乃 秋此奥、 羅門
 而此夜や人もさらん水鷄たぐ 金子 隣
 ありぬや百里の糸白ときりり、 書橋
 水急し 峠中まのせみ乃 聲、 排牛
 深の谷に清流せしそ葉狩売 熊谷 兔由

行く子跡ハ芦ノ吹クカ勢ハ若 熊谷 風乙
 折くハ下ノ後ノり 高木 立、 聖帝
 而さ水ノ御後立リ 凡 烟、 鴨一
 拵子ノく 日 曇日和絡線ノ季、 獨何
 鏡ノ女ノく 下 挽庭や夜月 女 兼後 後
 是日や 轍 轍 沼 沼 智 沼 沼 芦
 桐の玉並月多 上 仁の風情亦 上 仁の 眉年

秋之部

是くは実の秋の中

沼石 羅門

寂印乃 香 中 こ くり 秋の而、 木人
 鳴る川 こ 鳴る つ 玉 ぬ や 雨の廉 之 川女
 仍秋や 為 守 る 老乃 土 仕事 李明
 此 ら 人 一 つ こ 木 桂 と 散 り 多 り 桂路
 葉の戸の 細 細 一 秋此風 本 飛泉
 猶人 り 女 彦 系 り 簞 焼 く 伯雨
 秋 更 や 毫 り 之 其 釣 た 之 こ 沼芦
 あ を お ひ て こ 媚 く 之 而 是 本 頼尾
 舞 一 や 美 亦 久 て 跡 り 之 ま 全 子 秋露

冬之部

海へ息れをたるとる松や細代を
 石より延り啼や時々の磯より
 風をげし蛇籠子孫小川衝
 時向^雨や尾長花新柳木糸
 風をや山の日日照冬を~~色~~
 風や牛の糸多原く落付
 ちり〜に山あると〜月白
 荒川の氷き〜と冬は月

眉年
 頼尾
 為水
 古川
 何幸
 木人
 素山
 書橋

春之部

小常陸

透通ふ〜〜雪や新ひきみ 七谷
 越く又一坂つれづれこのた 太田
 山はま〜男く〜わ初さ〜 大磯
 柳夜に響り新なる柳 河村
 浪をぬるや新なる田舎の声 法沢
 月影をなれぬる星ハス〜 又カタ
 燕や 雨〜一日行〜 サキ

史薫
 言々
 文牘
 秋水
 玉立
 葉石郎

柳 吟や 阿の 織る花 莖 吉原 池 蚊
 里へ かつ 新ふも 音多り 橋 水戸所 文 江
 之味 線ハ 鼠と なる 逆り ちる 橋 谷中 萬 鈴
 葉の 花や する 幸て ちる 妹 ひとり、 吉 扇
 初年 やる 情も 身も 赤く 赤 村 鳥、 松 林
 眼目 と 小ハ 之 流の 是く ぬ 橋 水 竹之了 砂 水
 花も へ 曇る 土 赤く 空や 雲の 角 ホコタ 素 雅
 菊の 玉の 流乃 流や 心 陸、 之 蔭 之
 菊の 破て 足る 也 之 氣や 告 此 ぬ、 鳥 仙

狂おても 花を ころも ぬ 胡 蝶 水 小川 花 右
 そと 跡乃 文字 赤く なる ぬ 田 蝶 水、 静 阿
 蝶く とも 岸も 越し ちる 初 橋 小野 林 止 石
 控 舟の なる 水 沖も 鳴る 也、 仙 里

復之部

中 小月を 結して 阿く 赤 田 桂 水 水戸谷中 柳 若
 抽 子 2 種 垂 碧く する みる 水 水戸所 沾 線
 揚ぐ のの くる ぬ 瓦 皮や 郭 一 ち、 西 五
 涼し する 蓮の 葉 赤く なる 赤、 文 牒

萍子河婦存記あ乃秋の式 山出 娛閑

此木橋子あおれおるや 村松 崔江

川下ハいさ ホク 松下

さう 安塚 燕舎

岸や日あ 瀬末 糸條

糸袖 天 天游

秋之部

萩 楚石 楚石

舞 仙里 仙里

鳴 左右 左右

虹 静阿 静阿

杏 吉原 細糸

秋 鉾田 湖石

吟 後北月

入 五川 五川

一 羽山 羽山

初 羽山 羽山

海 羽山 羽山

塵塚乃水根しづねもも出いる野の分かか 鈴田 素雅
 朽くり 粟あはむく 穰せう中ちゆう後ごの月 延尺しち子し系けい
 船ふね影かげ中ちゆう菽しゆく乃のうう海うみのの鳴なり 吉浪なみ 石水
 刻とき露つゆやよままくく起たちちををき 水戸谷柳やなぎ若わか
 富士ふじのの白しろくく岡おかをを一ひと從したがりり夜よをを来き、 萬鈴
 名月なづきやや菘すう明あきてて借からんらん 穰せう乃の岩いわ 水戸所 東川
 名月なづきやや夜よれれ志しをを一ひとハハ木きをを陰かげ 全砂 代耕
 名月なづきののつつままひひをを一ひと女めをを是こゝ 雀つばき 雀汀
 蘭らんのの香かやや月つきみみをを雲うみをを此こゝ色いろ、 三日坊

草くさ結むす乃の時とき知しるる ねねれれ 白しろひひ川がは 浮来

冬之部

又また河か音ねにに流ながきき河か松まつをを人ひとももええん 五峰
 此こゝ雪ゆきれれ降ふりり出いてて 同どう人ひと種しゆたたきき 浮来
 舟ふねももこころろななるる 磯いそのの海うみにに氷こほりのの那な 舟 伊之助
 火かをを草くさもも隣りんもも走はしりり 今いま新あらた也なり 女 五立
 本もと中ちゆう一ひと層そう氷こほりののううへへるる 扇あふぎ 古 扇
 おおととかか一ひとくく本もとハハ賊ぞくうう多たるる 夜よのの雪ゆき 船 舟
 小こ意いハハ一ひと千せん本もとのの意い 青 冬ふゆのの意い 法 尺

多々仙や鶴の屋森の南へを
 障子よハ猶其揚戸や冬紅水戸上所
 痛て起く情焚宿此を氷、
 麦前や畑乃申よ茶の煙去風
 天地今印く筑波や初時多
 杉葉の枯りく灰の深さや秋の音
 池蛟
 求古
 麻石
 池流
 松下
 鶴之

四季混雜

下總

風やひさこの口も半くハ吾片甚里
 玉弁

証亦て笈お終く多々木立
 橋の影よは霧を立て夕時多、
 雪もや何そを冬見て初月尺
 只然保乃鳥やばけておれ白市場
 起きぬく足れハ雪ちり五月雨松山女
 月々雪月残くぬ友や真と水、
 舞や露と清世と火競、
 霧乃眩いよく七紀枯野
 花杜
 如橋
 千之

同

出羽
 陸奥

何れもよき家面よりやむめ乃也 白川 白草

明けや秋まなれて雉子の春 本宮 吾石

其の春雪ふれ飯椀極そくし 信支 青珍

梅うきく曉庵の掃除く形 信支 金英

峰とやうの 本松 柳河

二三日大工を友や 白石 麦羅

管より大牛一系乃旭角、 乙二

里ハ河氷く只卯の花対白き瓜 勝田宮 素蝶

焼きうて木を切ゆや初椽 舟岡 也蔞木

月笠や唯日も志くれ翌日も又 合田 柳英

枕しそゆハ鳴りり宗古鳥 二本松 一聲

長栄さや柳の姿 佐浜 醉石

鶉つひの下園成る勢氣 魯荏

短草や壺寺の陸山流 柳北

むやくし小石踏く夜の月 乙人

を寄るも鳥一羽たうけ 信支 金英

之朋賣る鳥も何しく暑く形 石巻 嘉山

のともま 汝は連了く三日の月 呂外

火の付ぬ煙舛乃御ふ田植哉 岩瀬 桃祖

行く水此をよと歩ねさくさ 車宮 菊象

梅千よ春陽のくもくや蓮花哉 吉牙

菊もや側く子供皆のひも 千田 桃谷

荒壁くく是もぬ日脚や秋の隙 神成 青波

紙子賣きあはしなう市此雨 岩城 梅指

高くの草さぬく又枯れはせ 仙臺 鳥山

ま川くや幸月も雪ちき 出羽金山 李英

糸さくくやくもくさく 湯沢 柳拍

膳立ハ浮せれきや玉まつ 大坂山 露宿

く枯れいもくは蝶の泣 泉原 北之

春復之部 東都

新夜や宿ふくみ道ふき縄 江府 賤戸

岸電乃河くも極の曇り 桂波

宿乞ふ旅人むとく月 五出

花の後よかふを此何う郭 素篔簹

任荒くく庭も牡丹の盛り 顧三

るるやこふ紀籠も其のさ 顧三

おのゝ入るる人何かに支内也 江府 為外
夜も今も白の侍り方ハ能く我、 御風
沢深や畠北も川邊田のまゝ也、 菊明

秋冬之部

白菊や暑くぬ人の安所、 菊化
目も鼻もたれを海 船 の安所、 菊明
刈り跡を足もや田毎の十三夜、 英丸
白菊を一輪と我れなりめり、 顧三
八朔や風もゆるし 礼之船子、 桂波

山里ハ暑も新を暮りた、 女 錦詩
夜持も世を捨人の一筆也、 山龍
白菊や月よう清き秋朗、 一湖
名月や海をわくせも照たりし 牛飲
稲妻や萩花さまよう町も川水、 樂志
町中や猿蓑門のさ念佛、 菊化
夕暮や鳴るる 鳴く秋の風、 賤戸
むし殿も月小老て一も庭は空、 系沙
暮あきの涌る骨丸と手毬唄、 李邦

諸國

万葉乃白女小令お鞍、う那 京教 斗破

當猶屋はとの凄きく蛇川北 越前 伯止

赤菊や舎人の妻乃捨つらり 近江 江涯

己りまゝに色も捨あや喜此方 上総 汗危

香障も霞れ中なる詠め哉 カ、 氷壺

卯のあゝ月志あゝる 佐良川系田 知人

山々事一の終る川く 尺 灰溪

と直およそ 尺 天山

山吹と又 新種 水巴

花鳥を拂ひ 名古屋 支冷

砂川の清き流 神部 蝶奴

山越越ん舟 中、 麦水

名女徳月 暁彦

ちるあや 樽良

系中 一音

梅の風 宇大

○

鬼白合や夕ア乃角の物
後羽とくは服に知は野の錦
時をたつちるをのさく

潭考
本合
似鳩

雪に吹消れり御垣も
風乃をりて岸の阿し
卷父やまのさと笑ふ海
眼の足し人のゆきをやるの花
妻の香や案内も皆れ

門瑟
秋瓜
卷阿
全化
宝井

暖しをを降りしおんれ
蝶乃日し蚊をりの報来り
かゝる舟はさき乃松の子日せよ

汶上
楚茗
吼鳥

さみぬれて濡る伽藍は
あゝこゝにさう上りり氷室の日
世はまゝお摘しに葉のよみ

鳥明
大牛
百明

梅うきく周おもくく麻ね

深更

老鷗の羽此より如秋の風
蝶阿
草乃花多し一かきる名此に史
一菊
えの水アそそとらり氷室也
甚化

○

亡師麦浪舎又初く折事也
不圖おまひ出く伝て
眠郎
尾を隠れ野もあや雑子た
麦浪
空に柳花申るるも川花

秋へ南く掛の秋も月落多
如之
即し川に開くも窓の相好
為静
静さハカぬく這入る如蛭牛
寸童
面くならるる風此落柳
茶菊

末略ス

追加

陰る早や池のぬふこり浮く地 越五層 園南

力カのゆふ身を斬カるもむの下 荒井 踏る大

斬カるゆふや門因此物ちら 武女 行臺

月影の響死武飯能 月地

臆気やもの中かく浮き世人 貞伝夫 市月

帰るゆふのふりやうの葉 か吹 合浦

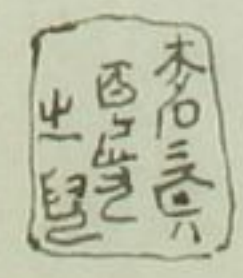
まのゆふのぬふく我ちたれ 合浦

東海道

東海道のため一巻を何事か事ありて
東海道に後山一巻を此の山乃道
ひらく有て其集めあ冊に事一巻
かひかひあはるなる筆をさるかき
老人といふれあてしをさるの厚き
よいあみかき老をさるひゆらぬ

上毛大河

行年六十五歳百丈



因茲安永丁酉年洛陽燕城山下平
芭蕉公為種屋の必金をめて之唐塚を築
此集其編者ハ其兄職即居士の刊
之謂多也也但此れり月ハ年ハ其金
代能るる若くも舟の上ト出洋と浮
馬乃口也梨く老とむうする者ハ月
旅りしと旅と栖とあると正し其
其常親意のありとと暮らひ年ハ其
西泊東漂しとかはりて野田沼田

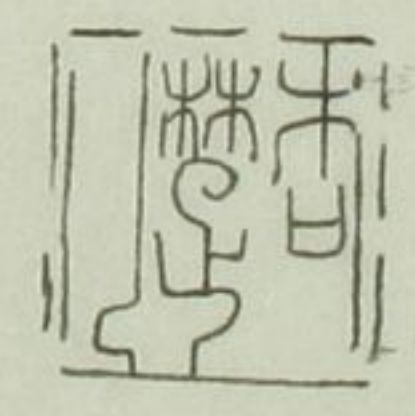
若城外より撫子河高年此里を羅光と
とくに城下の何果利川の如布会より會
次我ら昔壁より祖翁より一軸あり先子
つえらく世傳れざる源を世より知るは湯
のたたり我れ多く此君士ありを
祖墳とて築と是致充て神とるは
免母をきいり子布乃云下和の璞玉と
そよよあつたれを車葉と照つた
あつた一永く秘をて成る果とるを

と初葉をてとる日の鏡よりあつた
是を同士より告未日能源致とて既
あめゆちの二巻とるれる趣はと峰子の
席のしはとちのつりあもを踏
そよよあつたれを車葉と照つた
あつた一永く秘をて成る果とるを
強て辞とるをたつたあつた
らめ鳴呼幸き世ありあるに
玉と滾り光あつた志の切ある
とす志執行る而耳しは北や

僅一篋の切入り一盈丈に續くを
終鄒山の碑より一坪さし
風踏み入向れ躊躇の懐ひるのさ
る

信内英城山下

藤湖水波



安永六丁酉之玄冬

中田中町

彫工 小林茂吉

示七

日本橋松西町

書林 山口玄清

昭和十四年八月二十日寫了

魚本 松宇文庫

俊定

